

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」(6770m未踏)偵察行 その4

マザー（麻札）——カラコルムベースと新蔵公路の分岐点

7月29日の朝がやってきた。熱は38.6度と昨日とほとんど変わらない状態である。解熱剤を飲んでみる。その影響でしばらく眠れ、ぐっしょりと汗をかいた。しかし相変わらず食事をする気は起きない。周さんがおかゆを部屋まで持ってきてくれたが喉を通っていかない。「下痢だけでなく熱があるのが心配だ。病院へいかないか?」と勧められる。マザー（麻札）までは10時間、お昼に出てもなんとか今日の行動をすることは可能だと聞き、とにかく午前中休んでみてダメなら医者へ、よくなればマザーへということをおみんなにお願いし、もう少し休ませてもらうことにした。別室では、とにかく僕の状態が悪いので、1日延期しようという話も真剣にされていたようだ。ただ、僕としては、下痢の場合何も腹に入れず1日横になっていればなんとか回復に向かうという経験則があったので、それを願いながらひたすら横になっていた。しかし便意は否応なくおそってくる。1回トイレに立つと、続けざまに5、6回は行かないと治まらない。しかし、10時頃になって、熱は下がってきて、便意も少しずつ間遠になってきた。これならなんとか行かれそうである。11時に、お昼になったら出かけましょう、ということにして準備を始める。結局出発は11時40分。出発に先立ち、クディ（庫地）で通過チェックの際、GPSを持っていると具合が悪いとヌルさんがいうので、GPSは運転手の秦さんに預ける。全く登山には理解のない国である。

12:20 ズォフ（沢普：ウイグル名ポスカム）を通過。13:15 イエチョン（叶城：ウイグル名カルギリク）の新蔵公路の起点である0公里市場にて、コックであるヌルさんの裁量権のもと野菜と肉、卵など生ものの買い出し。肉は塩漬けにしてもらう。昼食はラグ麺だったが、小生は相変わらず食欲がないのでバナナを半分だけ食べた。秦さんは、日産パトロールにガス（CNG）とガソリンを満タンにする。この車はハイブリッド車なのだ。中国では今やタクシーは100%CNG車であり、二輪車は都市部では電動車が普及している。驚くべき事に自転車はほとんど見かけなくなった。大企業の論理に振り回されている日本は、エネルギーの問題について、遙かに遅れている、中国というこの大きな市場のこういった変化は、早晩日本企業を圧迫するだろうし、今のままでは生き残りはできないだろう。わずか5年ほどで自転車を隅においやり、ガス車が増えてきた変貌ぶりを見て改めて感ずるところは多かった。

14:50いよいよ新蔵公路にはいった。砂礫の沙漠を車は進んでいく。途中黒煙と赤い炎をあげている油田があった。16:00 85km進んだククヤ（柯克亞）で、公安によるパスポートチェックがあった。カメラを出したら、それに気づいたヌルさんがすかさず「レンズを向けないほうがいい」とアドバイス。結構デリケートな地域に入ってきたことを感ずる。ここからしばらく行くと道はダートになり、一気に標高をあげアカズ（阿卡孜）峠（3155m）に達した。そこから2850mまで標高を下げた地点が国境警備最前線基地ともいうべき「クディ」である。やはりウイグル人と外国人に

は、チェックが厳しいのか、最初に秦さんと周さんの二人が我々全員の許可証と身分証明書、パスポートをもって手続きに行く。しばらく車の中で見ていると、検問所から出てきた二人が我々にも来いと手招きをする。検問所ではかなり入念にパスポートとビザがチェックされた。たまたま我々は16日間の滞在になったが故にビザを取ってあったのだが、これが怪我の功名だった。中国では15日以内の滞在については通常ビザはいらないはずだが、やはりこういうところではそのルールが通じないらしい。4年前に西藏でも同じような経験をしたが、国の方針が僻地で通じないことはまああることだ。我々には登山許可証があるわけだが、それとて警備員の胸の内で握りつぶされ、入境不可ということだってないとは言えないのだそうだ。まあ、今回に関しては多少は時間がかかったが、結果的には何の問題もなかったとっていいだろう。最も、周さんは最初に検問所に入るときに、「これお土産ね」といってジュースを一ケース持って行ったし、ヌルさんの話では事前にカシュガルの董さん（今や旅行社の社長だが元軍人で顔が利くそうだ）から電話を一本入れてもらってあるなどという話も聞いていた。クディを通過したのは19:00。クディからは再び道は一気に高度を上げていくダートとなり、セラック（賽力亞克）峠を越えた。標高は4830m。本来ならここはもう少し下から歩いて越えたかったのだが、私の体調不調もあって、時間も押していたので車で一気に越えた。峠の付近はガスっており見通しは利かなかった。発熱こそ治まったものの、我が腹の様子は相変わらずであり、休憩のたびに沙漠の中に飛び出してうずくまる。何も食べていないのによく出るものだと感心するくらいに、水溶便がチャーっと出る。

峠を越えると景色は全く一変し、赤茶けた山肌の谷となった。21:48 マザー（3790m、イエチョンから241km）到着。右に行けばカラコルムベース、左に行けば我々のベース。軍隊と、新蔵公路を行くトラックのための木賃宿と食堂が数件だけの小さな集落だ。マザーとはウイグル語では「墓場」の謂だそうだが、さしづめやっと着いた最果ての地という趣からのネーミングか。風が強く、砂埃が舞い、確かに最果ての場所というイメージが湧いてくる。しかし、目の前を流れるヤルカンド河の対岸には未踏のマザー峰へと続く白い峰が光り、カラコルム方面の谷も、西藏方面の谷も魅力的な口を開けており、我々山登りに取っては、墓場ならぬ母（マザー）なる場所といったほうがはるかにふさわしい感じでもある。ところが着いた早々、ヌル、周、秦の三人が曇った顔をしている。何でも、3日前にこの先で道が崩れ、現在通行できない状態だというのだ。そう聞いて周囲を見回すと、集落の終わるあたりに30台程のトラックが並んでいる。開通を待ってここで待機しているのだそうだ。いずれにせよ今日の目的地はここである。トラックの運転手で宿は満員とのことであるので、我々は一件の食堂の脇の風が比較的弱そうな場所にテントを張ることにした。小生はといえば、相変わらず食欲はなく下痢をしているので、テントを張るや否や、シュラフに潜り込んだ。一時ほどしてヌルさんが、「食事です」と呼びに来た。我々がテントを張った隣の食堂で用意された食事は、日本風にいえば「すいとん」である。味もあっさりした塩味でうまいのだが、まだ腹具合がよくない私は4口ほどすするのがやっとであった。結局、昨日の夕方からほぼ丸1日何も食べていない。いつになったら本調子になるのだろうか？高度の影響も心配になる。しかし、それより何より、道が通行止めというのは想定外である。食堂で運転手や店主の話を聞いている限りでは、今日明日に開通するという状況下にはないようだ。下痢とこのことへの対応とで、結局一晩中ゆっくりすることはできなかった。